

愛の精神勝利法

張愛玲著・濱田麻矢訳
中国が愛を知ったころ
張愛玲短篇選



四六判 192頁
岩波書店
[本体2,400円+税]

張愛玲の作品が新たに三編、日本語で読めることになった。多年の渴が癒される思いの読者も多いことだろう。

濱田麻矢氏による「沈香屑 第一炷香」「中国が愛を知ったころ」「同級生」は、それぞれ「第一炷香」(一九四二年)、「五四遺事 羅文濤三美団円 (State Mates: A Short Story Set in the Time When Love Came to China)」(英語版一九五六年、中国語版一九五七年)、「同学少年都不賤」(一九七三〜七八年)の邦訳である。上海でのデビュー作、米国移住直後、そして米国滞在が二〇年を迎える頃と、それぞれ異なる時期の未邦訳作品から選ばれ、執筆年代順に収録されている。

これまでに書籍として翻訳刊行された張愛玲の作品には以下のもがある。()内に原題を掲げる。

及川 茜

- 一、柏謙作訳『赤い恋』(赤地之恋)、生活社、一九五五年。
- 二、並河亮訳『農民音楽隊』(秧歌)、時事通信社、一九五六年。
- 三、『浪漫都市物語』(上海・香港'40'S)、JICC出版局、一九九一年。収録作品は上田志津子訳「戦場の恋——香港にて」(傾城之恋)、清水賢一郎訳「封鎖」(封鎖)、「香港——焼け跡の街」(燼余録)、「囁き」(私語)、「やっぱり上海人」(到底是上海人)。
- 四、藤井省三訳「外国人が京劇およびその他を観ると」(洋人観京劇及其他)、『笑いの共和国』(中国ユーモア文学傑作選)、白水社、一九九二年。
- 五、池上貞子訳『傾城之恋』、平凡社、一九九五年。収録作品は「金鎖記」(金鎖記)、「留情」(留情)、「傾城之恋」(傾城之恋)。

六、垂水千恵訳「赤薔薇・白薔薇」（紅玫瑰白玫瑰）、『世界文学のフロンティア4 ノスタルジア』、岩波書店、一九九六年。

七、伊禮智香子訳「若い時」（年青的時候）、『中国現代文学珠玉選 小説2』、二玄社、二〇〇〇年。

八、丸尾常喜訳「心経」（心経）、『中国現代文学珠玉選 小説3 女性作家選集』、二玄社、二〇〇一年。

九、方蘭訳『半生縁——上海の恋』（半生縁）、勉強出版、二〇〇四年。

一〇、南雲智訳『ラスト、コーション 色・戒』、集英社文庫、二〇〇七年。収録作品は「色・戒」（色・戒）、「愛ゆえに」（多少恨）、「浮き草」（浮花浪蕊）、「お久しぶり」（相見歡）。

一一、垂水千恵訳「色・戒」（色・戒）、『池澤夏樹個人編集 世界文学全集3—05 短篇コレクションI』、河出書

房新社、二〇一〇年。

反共小説と目された五〇年代の二作の長篇が訳された後、九〇年代に入って主に短篇小説集『伝奇』と散文集『流言』（ともに一九四四年）の二冊から占領下の上海で書かれた代表作を中心に邦訳紹介がなされてきた。二〇〇四年に『半生縁』が紹介されたのを皮切りに、米国移住後に発表された作品も

注目されるようになってきたといえるだろう。『中国が愛を知ったころ』はちょうどこうした邦訳の歴史を踏まえた上で、三編と量は控えめながらも満遍なく各時期の作品を選んだものだし、ただし、そこには三編を貫く張愛玲の姿勢があり、訳者の選択眼が働いているのは確かだろう。

『中国が愛を知ったころ』という書名については、「五四遺事 羅文濤三美団円」の英語副題からとったものとの種明かしが訳者あとがきにおいてなされている。正直なところ、収録三編のうち一編がこの作品だと知った時には少々面食らった。軽妙なコメディではあるが、なぜあえてこの作品を、との問いに対する答えは、訳者あとがきに見いだされる。張愛玲の没後に公刊された自伝的小説『小団円』に、政治犯として潜伏生活を送る夫にヒロインが面会し、夫が関係をもった二人の女性と自分の誰を妻にするのか選ぶよう問いかけるが、「三美団円」したいとの意思をはのめかされる場面がある。「妻のうちの一人」にされてしまうとほまつたく考えもしていなかったヒロインはそこで大きな傷を負う（二八〇頁）のであり、つまり、「中国が愛を知ったころ」は張愛玲自身の経験に基づいた作品だということだ。「そしてこのストーリーをメロドラマではなく、破綻のないコメディに仕立てたところに張愛玲の真骨頂があるだろう」（二八一頁）と訳者は記

している。

この「真骨頂」こそが、張愛玲が数多くの読者を今なお強く惹きつけて離さない所以でもあろう。

張愛玲の筆になるヒロインたちは、同情を寄せられるべき哀れな存在としては造形されない。「中国が愛を知ったころ」の三人の妻たちも、最終的に夫の家に迎えられるまでには、愛を分けあたえられるのを待つのではなく、夫の身体から自分にとって必要な部分をむしり取ってゆくしたたかな手腕を身につけたのであるように思われる。結局のところ、彼女らはみな自分の欲するものを手にしたのだ。それがたとえ当初の所期とは異なる形であったとしても。

しかしその一方で、場合によっては、運命や愛情の波に抗うすべもなく呑み込まれたわけではなく、あくまで自分が運命を選びとったのだという自負こそがヒロインを追いつめることにもなる。

たとえば、「沈香屑 第一炉香」でジョージ喬が妻となった薇龍に何気なく残酷な言葉をかける場面にそれは最もよく表れている。「君には僕が嘘をついて聞かせる必要はないんだよね。君は自分で自分を騙せるから」(八八頁)とジョージ喬はうそぶくが、自分を愛していると嘘をつくことすらしようとしないうこの男の妻の座を手にするため、薇龍は色と引き

換えに得た金品で彼を養おうとするのである。さらにジョージは、「いつか君は、僕がどれほど賤しい人間かっていうことを認めざるをえなくなるだろうな。そのとき、君は僕のためにこんなに犠牲を払ったことを後悔するだろうね！」(同前)と追い打ちをかける。そう言われてしまえば、薇龍も「私があなたを愛してること自分で自分をいろいろ責めることがあっても、あなた自身を責めたりはしないわ」(同前)と笑って答えるしかない。彼女はそれによって自らの尊厳を守る。

張愛玲の描くヒロインは、愛に対して頭を垂れなければならぬとしても、有形無形の束縛に対しては意地を見せる。そしてまた逆に、その意地のためであれば、自分に頭を垂れさせたものを愛であり自分の選択であると思ひこむことすら厭わない。目の前に広がる真つ暗な荒野も、誰かに押しつけられたものではなく、自分で望んだものだと考えることで、どこまでも強風に抗って歩を進めてゆく。たとえそれがわずかひとつまみの沈香の削り屑を焚くほどの時間にすぎないとしても。

そして、張愛玲の真の恐ろしさは、こうした女たちのしたたかさと同時に、透徹した視線でその脆さを容赦なく暴き出している点にある。その最たるものが「同級生」だ。

人間関係のちよつとした引っかけり、その時はさほど気に

も留めず過ぎてしまったのに、後になって不意にざらざらと思い出されるようなことがある。張愛玲の筆は、わざわざそのざらつきを執拗に舌で嘗めるように描く。そこでは過去の自分たちが現在の目によって細かく点検され、冷徹な評価が下される。

「同級生」が鋭く突きつけるのは、栄耀栄華を極めるかつての級友との異国の地での再会によって、わが身のみじめさを思い知らされるといふだけのことではない。すっかり様変わりした学生時代の友人の姿をとって現れるのは、過ぎ去った時間なのである。別れてきたはずの時点から、二人の身体に同様に降りつもった時間が開かれた玉手箱のように立ち現れる。二人とも遙かに遠く歩いてきた筈なのに、なぜお互いの過去ばかりが亡霊のように二重写しになるのだろう。

「同級生」のヒロインである趙珏はそもそも上海の出身ではなく、上海語が話せないいで学校時代もなかなか儀貞以外の友達を作ることができずにいたのだが、家を飛びだしてからは次々と居場所を変え、それに応じて新しい言葉を覚えて生きてゆく。話せなかった上海語も、北京で上海人に話しかけられて答えざるを得なくなってみれば、実は話せるようになっていたのだった。同棲した朝鮮の男から教わって朝鮮語もマスターし、渡米後は朝鮮語と英語の通訳で生計を立てる

ほどになる。その代わり、儀貞と話す「国語」の話しぶりもすっかり変わってしまい、別人のようだと言われるほどだ。ふとした感嘆詞にも上海語の調子がそのまま残る儀貞とは異なり、趙珏は一つの言葉の中に安住することを許されない。

「沈香屑 第一炷香」と「同級生」のヒロインは、いずれも生まれ育った土地を離れ、新しい土地で新しい言葉を話すうち、気づいてみれば思いもよらなかつた姿に変貌している。それは自分が選んでのことなのだと思ひ込み、うっすらと背後から忍び寄る後悔から目を背けて気づかぬふりを決め込もうとしても、過去は不意に前に現れる。

自分が求めたものを直視し、愛していると信じた男と一緒に暮らそうとすれば、「自分で自分を騙」すしかない。自らをなだめすかし、あやし、自分が望んだ愛なのだと言ひ聞かせる。まさしくこれは愛の精神勝利法ではないだろうか。張愛玲はそんな女たちのしたたかさと同時に、脆さと滑稽さをも遠慮なく抉り出しているのだ。

最後になったが、訳文の妙については特筆すべきだろう。独特の香気ある張愛玲の文体は、そこに語られた出来事そのものよりも、台詞の中に仕込まれた分る人には分かるようなごくわずかな刺や、ちよっとした言い回しが生むざらつき

を襲のようにたたみ込むことで作品に陰影を生んでいる。深い読みに基づいた一字一句の訳の正確性に加え、こうした陰影によって形づくられる張愛玲の世界を日本語に移し替えるにあたっては、ひとかたならぬ苦心があったことは想像に難くない。時代の雰囲気や失うことなく若い読者に届けるための、訳語の選択における深い心遣いとバランス感覚は卓抜であり、特に服装描写において光る。たとえば、表題作に見られる「細腰喇叭袖黒水鑽狗牙辺雪青綢夾襖」（張愛玲『鬱金香』、北京十月文芸出版社、二〇〇六年、三二六頁。原文は簡体字）という上着は、「中国風の裕の上衣は薄紫色で、絞った腰回りにラッパ袖、黒いギザギザのレースの縁取りがついていた」（九四頁）との巧みな訳によってようやくイメージを結んだものである。こうした描写の積み重ねから、その場の匂いや音まで含めて、鮮やかに情景が浮かんできた。

作品と訳者の幸福な結びつきから生まれたこの一冊がより多くの読者を獲得し、日本語の中で新たに張愛玲が息づいてゆくことを喜びたい。

(おいかわ・あかね 神田外語大学)

展覧会のご案内

みんなが見たい優品展パート14 中村不折コレクションから
「二ヶ月限り！ 書道博物館の名品ぞらり」

会期：3月16日(金)～4月15日(日)

※月曜休館／3月26日(月)、4月2日(月)はサクラ特別開館

会場：台東区立書道博物館(東京都台東区根岸2-10-4)

開館時間：9時30分～16時30分(入館は閉館の30分前まで)

観覧料：一般・大学生五〇〇円、高・中・小学生二五〇円

※20名以上の団体料金あり。毎週土曜日は台東区内在住・在学の小・中学生とその引率者の観覧料無料。障がい者手帳、または特定疾患医療受給者証をお持ちの方と、その介護者は観覧料無料。

みどころ：①篆書の名品 甲骨文／小克鼎、②隸書の名品 西嶽華山廟碑／張遷碑、③敦煌・トルファン写本の名品【重要文化財】法句譬喻經殘卷／【重要文化財】春秋左氏伝殘卷、④王羲之の名品 蘭亭序／十七帖、⑤清時代の名品 王鐸・草書詩卷／鄧石如・隸書八言聯／淳化閣帖(夾雪本) 卷第七・卷第八、⑥日本古代碑の名品―ユネスコ世界記憶遺産の石碑拓本

*書道博物館は、館内の設備工事のため、4月16日(月)から9月25日(火)までの約5ヶ月間、全館休館となります。詳しくは同館ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.taiocity.net/zaidan/shodou/>